６　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。　〈東京都立大〉二〇二一年度出題

　古代人にとって稲はもともと作物なのではなく、けっして農業生産の単位などではなかった。稲は本来的には〈それ固有の目的＝究極〉を秘めており、精霊的な真実を持つ存在なのだった（それが、「稲には霊が宿っている」という信仰の基盤である）。農耕にしむ人間は、このことを、奥深くで、必ず意識している。つまり稲は本来的には〈霊〉的真実を持つ存在であり、自分たちともある種の深い連続性を秘めているのに、農作業のなかでは〈有用な作物〉として捕捉されている。それ固有の目的＝究極かららされ、その自然的生命体としての在りようを否定する仕方で引き出されて、まるでやのような道具が位置する〈面〉と同じような面のうえにすえられている、と。

　そういう奥深い意識がなかったとすれば、稲の初物をげる祭りは生まれなかっただろう。ということはつまり、そうした祭りは必然的に、いったん否定的に媒介され、〈対象〉化されることで、その対象化の活動（すなわち労働）を実行する主体である人間に役立ち、奉仕するよう作り変えられた生産物としての稲を、もう一度否定することを通じて、その本来的な在りように戻す、という意味を持ったはずである。古代人の心的プロセスを、こう想像してもよいだろう。〈霊〉的真実を持つ存在である稲を栽培し、加工し、操作して、利用する物、有用な物に変えてしまったということは、〈ブジョクし、失墜させた〉ことになる。だからなんとしても稲に宿る霊を、Ａ本来の真実へと立ち返らせねばならない。

　そのためにはどうすればよいのか。日常的な行動や活動の循環のなかで、そのまま享受し、利用するのではいけない。なぜならそのように有益な活動の連なったサイクルのなかで消費されたり、利用されたりしている限り、生産物としての稲や羊は基本的にＢ〈事物たち〉の位置する次元にとどまっているから。したがって、羊を殺害するとか稲の穀粒を食べて消し去るといっても、民衆のひとりひとりが日カテとして殺害したり、食べたりするのではなく、生産（すなわち再生産）に役立つ回路から引き離すような仕方で破壊するのでなければならない。民衆の個々人が消費する場合、各人はその食物から新たな活動エネルギーを得て、再び生産活動に従事できる。すると羊や稲は見かけ上破壊され、消失したかに思えても、実はその〈有用な事物〉としての価値を、持続のうちに保存する。

　だからこそ、供犠（および祝祭）として破壊し、消失する、というふるまい方が発生したのだ。捧げ物、贈り物にする、という供犠＝祝祭が、どうしても必要なものとして求められたのである。Ｃ〈事物の世界〉を超えた次元がなくてはならないものとなった。生産活動を中心とし、その拡大や再生産に役立つやり方で享受（つまり消費）したり、交換したりする、通常のエコノミーの円環的回路を超えたの次元が、必須のものとして感受されたのだ。こうした〈彼方〉という次元がおそらく、少しずつ〈神々の審級〉として定まっていくだろう。

　〈神々への捧げ物〉として贈与されれば、肥えた羊や豊かにった稲はなににも役立つことのない無益な仕方で、だがしかし〈晴れがましい〉様式で消失されることになる。

　肥えた羊を捧げ物として殺害する祭り、あるいは稲の初物を〈にえ＝〉とケン上する祭りは、根本的にそういう意味を持っている。つまり晴れがましい仕方で純粋に贈与するという意味を持つ。労働の成果である貴重な富を、再生産に結びついた交換や消費という通常の回路の外へと引き出ソウゴンな、かつ晴れやかな様態で〈破壊する〉ことだ。農作物・家畜・産物と化していた稲や羊を、光輝あるやり方で否定すること、どこかでなにかに有益となる仕方で消費するのではなく、その〈事物〉性を究極的に破壊し、消尽することである。

　それゆえＤ供犠にとって本質的なのは、殺害して血を流すことではない。そうではなく、贈与すること、それも放棄する仕方で贈与することである。ただ、死が〈事物たちの構成する秩序〉の最大の否定であり、〈事物が要請すること〉を、すなわち有用性という価値が損なわれることなく保存され、持続することを最も強く断ち切る力であるため、供犠と死は堅く結ばれているだけである。

　肝心なのは、生産された富や資財が必ず〈持続する必要性〉に服したやり方で消費され、手放されるエコノミーの回路から離脱して、なんら留保のない、無条件な〈消尽ゲキレツさに移行することである。作り出し、保存する世界の外に出ることだ。供犠とは〈後に来るはずの時〉を期待しつつ、そこを目指して行われる作業や操作の、また自覚していようといまいと合理的に実行される消費や交換―そこに、交換的贈与も含めて、つまり明確に交換へと帰着する贈与も含めて―のアンチ・テーゼであり、Ｅその瞬間そのものにしか関心を持たない消尽である。その意味で、供犠とは純粋な贈与であり、放棄なのだ。

（湯浅博雄『贈与の系譜学』より　一部改変）

問１　傍線部（ア）～（オ）のカタカナの部分を漢字で記せ。

問２　傍線部Ａ「本来の真実」とはどういうことか、問題文に即して説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「〈事物たち〉の位置する次元」、傍線部Ｃ「〈事物の世界〉を超えた次元」について、それぞれどういう次元か、問題文に即して説明せよ。

問４　傍線部Ｄ「供犠にとって本質的なのは、殺害して血を流すことではない」とあるが、筆者は「供犠にとって本質的」であるとはどういうことと考えているか、問題文に即して説明せよ。

問５　傍線部Ｅ「その瞬間」とはなにか、問題文に即して説明せよ。

◎問６　古代人の供犠についての筆者の考えを一〇〇字以内でまとめよ（句読点も字数に含める）。

【解答と採点基準】

問１　（ア）＝侮辱　　（イ）＝糧　　（ウ）＝献

　　　（エ）＝荘厳　　（オ）＝激烈（劇烈）

問２　Ａ稲は本来、農業生産における有用な作物としてとらえられるべき存在ではなく、Ｂ固有の目的を秘めた、Ｃ精霊的な真実を持つ Ｄ自然的生命体としての存在であるということ。

Ｂ・Ｃの内容がなければ全体０。

Ａ＝３

Ｂ＝２〔「究極のものとして」なども可。〕

Ｃ＝３〔「稲に霊が宿っている」なども可。〕

Ｄ＝２

問３　前者は、Ａ日常的な行動や活動の循環のなかで、有益となる仕方で事物が消費されたり、利用されたりすることで、Ｂ生産の拡大や再生産に役立つという事物としての価値が持続する次元である。一方後者は、Ｃ事物が再生産に結びついた交換や消費という前者に見られるエコノミーの回路を超え、Ｄ無益ではあるが晴れがましい仕方で、Ｅ供犠として純粋に神々に贈与されるという意味を持って消尽される次元である。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２

Ｄ＝２〔「無益」と「晴れがましい」の両方の内容が必要。〕

Ｅ＝２〔「供犠」と「神々に贈与」の両方の内容が必要。〕

問４　Ａ生産物の有用性という価値を保存、維持していく回路を断ち切り、Ｂ生産物としての秩序を破壊するために、あえてＣ生産物を無条件に消尽するという仕方で、Ｄ神々に純粋に贈与すること。

Ｃ・Ｄの内容がなければ全体０。

Ａ＝２〔「死」について言及しているものは不可。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝３

Ｄ＝３〔「神々に」がなければ０。〕

問５　Ａ人間の生産活動の回路の中で、Ｂ後に来るはずの未来のために役立つ今ではなく、Ｃその回路から離脱して、Ｄ純粋な贈与としての消尽を伴う供犠が行われる Ｅ今この時が目的、価値であるような瞬間のこと。

Ｄ・Ｅの内容がなければ全体０。

Ａ＝２〔「合理的に実行される消費や交換によって」なども可。〕

Ｂ＝２〔「〈後に来るはずの時〉を期待」の説明。〕

Ｃ＝２〔「エコノミーの回路から離脱」なども可。〕

Ｄ＝２〔「供犠」「贈与」のいずれかがあれば可。〕

Ｅ＝２〔「その瞬間そのものにしか関心を持たない」から読み取れる内容であれば可。〕

問６　Ａ有用な生産物に作り変えられた物を、Ｂ霊的真実を持つという本来のあり方に戻すために、Ｃ生産に役立つ交換や消費に繫がる回路から引き離し、Ｄ有用性という価値を破壊する仕方で消尽し、Ｅ神々に純粋に贈与する行為。

（97字）

Ｄ・Ｅがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２